

オープンシステム病院の運営状況に関する研究

— 4つの医師会病院におけるケース・スタディ

正会員 青木 正夫*

同 猿渡 栄太郎** 同 友清 貴和**

§1. はじめに

本稿では、病院管理学会用語委員会の提案に沿って、オープンシステム病院を次の様に定義する。〈定義〉オープンシステム病院とは、病院と雇用関係がなく自己診療所を別に持った医師が、自分の患者のために病院を使って診療する事が認められている病院を言う。

地域医療計画に際して、建築関係者からもオープンシステム病院がかなり多く提唱されたが結果的にはほとんど破綻しているのが現状である。本研究では、現在運営されているオープンシステム病院の中で、院長のある4つの病院を選び、調査分析する事によりオープンシステム病院の地域計画、病院管理学的成立条件を探る事を目的とする。さらには現行医療制度の行き詰りの中で、今後の包括的地域医療計画の1つの打開策を見出そうとするものである。

§2. 調査の概要

それぞれ地域的特性を持った4つの医師会病院 [T病院：中都市に成立。且つ我国初のオープン方式病院 O病院：中核都市における病院 R病院：低密度地域の病院 I病院：大都市周辺地域の病院] を対象とし、入退院簿、病棟日誌、手術記録の各1年分、病院設立記録、運営内容等の資料を基に、それぞれ次の様な調査分析を行なった。1)主治医の利用圏 2)手術協力体制 3)入院患者の年齢と入院期間。尚、表2-1に各病院の概要を示す。

病院名	病床数 (床)	常勤医数 (名)	看護婦数 正 准 助	病院のある 都市の人口 万人
T 医師会 病院	235 [一般201 結核34 実質上は(0)]	4	23 39 21	(市) 9.8
O 医師会 病院	160床	13	26 36 2	(市) 26.1
R 医師会 病院	49	2	5 11 10	(町) 11.7 (町) 1.2
I 医師会 病院	125 [一般80 結核22 伝染25]	1	9 11 9	(郡) 5.6

表2-1 病院概要

§3. 主治医の利用圏

利用主治医を地図に落とし、各受病患者数の割合を圏域毎に累積したものが図3-1である。T病院はほとんど2km圏内の主治医で完結している。これはT病院から2km圏に市街地がおさまり、各診療所も同じ分布形態を示しているため、利用圏から見るとかなり恵まれた条件を持っている。これに対し、I、O病院では立地場所が診療所分布の中心から離れているため、4~6km圏の診療所からの利用が急増する。さらにR病院ではこの圏域が10~25kmにまで広がっている。以上オープンシステム病院の利用圏域は、近距離に限らず、多少広がっても十分成立できる要因を持っている。

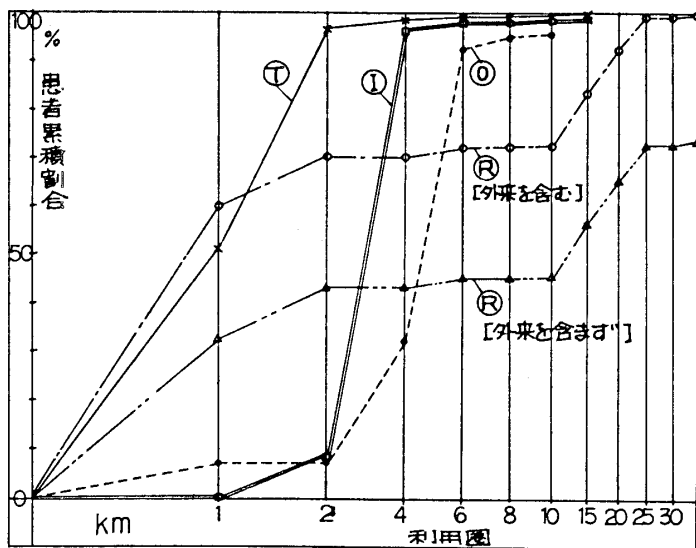


図3-1 患者累積割合と利用圏域

§4. 手術体制

1)手術件数と手術の時間帯(表4-1)：オープンシステム病院における手術は、開業医の診療時間配分や共同手術のための時間調整等の理由から、手術の行なわれる時間帯にかなりのかたよりがあり、手術室利用に問題点が予想される。事

区分 時間帯	T 医師会病院		O 医師会病院	R 医師会病院
	昭和51年	昭和46年		
8時~	16件 (19.5%)	9件 (4.8%)	111件 (44.9%)	2件 (1.7%)
13時~	32 (39.0)	68 (36.6)	93 (37.7)	90 (75.6)
16時~	32 (39.0)	87 (46.8)	28 (11.3)	19 (16.0)
20時~	2 (2.4)	22 (11.8)	15 (6.0)	8 (6.7)
計	82件	186件	247件	119件

表4-1 手術件数と手術の時間帯

実、O病院を除いて午前中の手術は少なく、T病院では主治医が自分の診療を終えた19時以降の手術がかなり多い。O病院では13人の常勤医が手術に対してフルに活動できる制度となっているため、時間帯によるかたよりはあまり見られない。2)手術時の医師連帯状況(表4-2)：手術に際し、開業医が共同してメスを取れば「医療水準の面からかなり高度の手術まで消化できる事から、オープンシステム方式の大きな長所の1つとされている。表4-2によるとO病院は、常勤医を中心に全手術の3/4が共同で、後述する手術内容と合わせてかなり高度の手術も行なっている病院である。共同の場合、術者1介助者1麻酔医0~1という連帯が大半であるが、中には術者が3人となる場合もある。3)手術件数とその内容(表4-3)：行なわれる手術の内容は、各病院によってかなりの違いが見られる。T,R病院では、虫垂炎・外傷系程度の比較的軽い手術が多くを占めている。これに対しO病院では、癌、腫瘍摘出等の内臓系の手術を中心に、常勤医と開業主治医共同の高度な手術が数多くやられている。(注)〈内臓系〉とは複雑な内臓器官(癌、腫瘍)等の手術、〈外傷系〉とは骨折等の軽度の手術に分類した。

()内は%

区分	総数	単独		共同	
		件数	割合	件数	割合
T	179 (100)	66	(83%)	13	(17%)
O	255 (100)	64	(25%)	191	(75%)
R	127 (100)	102	(80%)	25	(20%)

表4-2 手術時の連帯状況

年齢	0-2	3-10	11-20	21-30	31-60	61-80	81-100	101-150	151-200	201-250	251-300	計
0-4	2											2
5-14	3	3	1				1					8
15-24	1	3		2	1	1						8
25-34	7	1	4	1	4	1	1					19
35-44	3	3	3	3	2	1	1	2	1			19
45-54	4	4	10	7	5	4	2		1	1		38
55-64	9	2	7	5	2	3	9	6	1	1		45
65-74	9	2	1	6	14	3	4	3	2	8		52
75-84	7	13	8	7	28	17	29	16	15	24		164
計	45	28	36	30	57	30	48	27	20	34		355

表5-1 患者年令と入院期間 (I病院)

年齢	0-2	3-10	11-20	21-30	31-60	61-80	81-100	101-150	151-200	201-250	251-300	計
0-4	17	69	10	2	4		1					103
5-14	19	51	18	1	5							94
15-24	10	38	13	4	3	3	2					73
25-34	18	39	16	18	15	9	3	5				123
35-44	21	48	9	12	13	5	3	6	1			118
45-54	27	24	27	20	18	8	13	4		1		142
55-64	20	35	26	20	24	14	5	4				148
65-74	7	13	18	7	11	4	6	5		1		72
75-84	20	44	47	29	56	23	30	23	7	1		280
計	159	361	184	113	149	66	63	47	8	3		1153

表5-2 同 (T病院)

年齢	0-2	3-10	11-20	21-30	31-60	61-80	81-100	101-150	151-200	201-250	251-300	計
0-4	9	7					1					17
5-14		5	3	1	2		1					12
15-24	9	32	19	10	11	4	5					90
25-34	7	33	21	8	24	6	7	1				107
35-44	8	29	23	16	24	9	10	6		3		128
45-54	9	22	20	18	39	21	12	3		1		145
55-64	10	21	22	16	43	21	16	5	1			155
65-74	3	4	5	7	18	11	10	2		1		61
75-84	10	15	19	28	50	27	25	13	3	2		192
計	65	168	132	104	211	99	87	30	4	7		907

表5-3 同 (O病院)

年齢	0-2	3-10	11-20	21-30	31-60	61-80	81-100	101-150	151-200	201-250	251-300	計
0-4	5	7		3	1		1					17
5-14	14	15	5	1	1							36
15-24	13	68	12	4	3							100
25-34	16	76	12	3	1	1						109
35-44	18	17	10	4	5	2	3					59
45-54	8	16	7	6	8	2	5					52
55-64	12	11	7	6	7	4	2					49
65-74	2	6	5	5	2		2					22
75-84	6	14	13	9	16	5	2					65
計	94	230	71	41	44	14	15					509

表5-4 同 (R病院)

内容	内臓系	虫垂炎		外傷系	眼科系	耳鼻科系	産科系	その他	合計	
		腹膜炎有	腹膜炎無							
T	51	8	1	19	18	9	14	7	3	79
	(10.1)	(1.3)	(24.1)	(22.8)	(11.4)	(17.7)	(8.9)	(3.7)	(100.0)	
O	46	26	0	64	70	5	3	6	11	185
	(14.1)	(0)	(34.6)	(37.8)	(2.7)	(1.6)	(3.2)	(6.0)	(100.0)	
R	178	2	20	24	2	5	14	13	258	
	(69.0)	(0.8)	(7.8)	(9.3)	(0.8)	(2.0)	(5.4)	(4.9)	(100.0)	
R	36	1	41	21	3	0	13	12	127	
	(28.3)	(0.8)	(32.3)	(16.5)	(2.4)	(0)	(10.2)	(9.4)	(100.0)	

表4-3 手術件数とその内容

§5. 入院患者の年令と入院期間 — 表5-1, 2, 3, 4

オープンシステム病院は、開業医が診療所にベッドを持っているにもかかわらず、死亡寸前の患者あるいはベッド回転率の悪い老人を回送する目的で利用され、運営に支障をきたす可能性がある。表でその傾向を見ると、I病院では患者の老齢化、ベッド回転率の悪化により運営に問題点が見られる。それに比してR病院では、開業医が往診を主とした自宅療養の方針をとり、ホームドクター的役割りを担っているため高年令の入院患者が極めて少ない。又、O病院は手術内容が複雑なものまでであるために1ヶ月~2ヶ月の入院が目立っている。

§6. 今後の課題

本研究では、オープンシステム病院の運営状況に関して基礎的調査を行なったが、従来言われていたオープンシステム方式の長短にはまだいろいろな疑問点がある。これらを一つ一つ解明して、オープンシステム病院の成立条件を探る必要がある。それらの知見をもとにこの方式に対して新たな提言を導き、ひいては建築計画上の問題点について検討を加えていきたい。

*九州大学教授 工博

**同大学院生